

弱法師

「父子の和解」という明るいテーマ、けれん味のないシテの性格、骨太の構成、曲趣の多様性などから、人気の点でおそらくベスト5に入っているだろう。白謡会でも習い物として最も上演頻度が高い。

曲趣の点で更に言えば、シテ謡の最初の長丁場、続いてのシテとワキの絡み合い、クセ並びに狂いの部分の技法(盛り上げ方と節扱い共)など、チャレンジする部位に事欠かない。何度も謡って、完全に自分のものにしておきたい。

シテⅡ最初の一セイから二枚にわたる独吟となるが、盲目の若者が杖を付きながらの登場であるから、じつくりと、かみ締めるように、さりとてもあまり弱々しくならないように謡う。(私の場合には、声量はそれほど落とさずに、少し眠たげに謡っている)

三丁表「石の鳥居ここなれや」は、形を見せながらの謡であることに留意のこと。

一番の山場は九丁裏からの狂い。中でも十丁裏、右の頬に西日を浴びながらの「おゝ・・」はここ一番の実力発揮の場所。通常は、オー①おー②おー③オオー④と、

③まで三段に浮かせ、④で収める。

狂いは、地謡も頑張りどころで、段々盛り上げていくが「げにも眞の・・」が高くなり過ぎて苦労するところ。ロンギに入ってほっとするが、その安心感を謡いに表現できれば申し分ない。

ワキⅡ旅僧に非ず、シテの父親であることを考慮に入れること。固有名詞を持つが、衣装は素裕、さりとても狂言の従者を共に連れている。謡いの格はこれらが判断材料。

三丁表の謡いはそれまでのシテのムードをきっぱり捨てること。この後の「や」と四丁表シテの「や」は全く趣が異なることも改めて認識して欲しい。

楊貴妃

大原御幸、定家と並ぶ、所謂「三婦人」の一つ。故に、地謡も含めて、あくまでも高く、優雅に謡うべきだが、他の二婦人に比べると本曲はいかにも果敢なく、ドラマ性が希薄である。逆にそのことを意識しないで、情感を注ぎ込み過ぎると、品位が落ち、厭味な謡いになってしまうので要注意。自制の必要な曲である。

シテⅡ柔吟の中音は低く、逆に剛吟の中音は高く意識して謡うべきことは鉄則と言ってよいが、五丁裏の「訪ふに辛さは・・」は、まさにこのことを意識すべき場所。しかし、最後が崩しとなるので、あくまでも自分の音域を考慮しなくてはならない。

ロンギでの、ワキ、地との掛け合いは、じつところらえて、相手のテンポに引きずられることなく、あくまでもシテの位を念頭に置いて謡うべし。

クリは、やや引き立てるも、気高く、美しく、ヒステリックにならぬよう。

技巧面では、六丁裏の「その初秋の・・」のところ。「その」は落ち着いて低目に謡い、「はあくつ」と思い切って高くせり上げる。善知鳥「木曾の麻衣・・」に同じ。

ワキⅡ三番目のワキは原則として重いが、この曲のワキも例外でない。特に、シテの登場

前の二枚半の長丁場では、じっくり謡って聞く者を蓬莱宮に導いていかなければならない。また、三丁表の「あくら美しの・・」は、気分を変えて心して謡うこと。

歌占

ユニークな曲である。役処それぞれに謡い甲斐があるが、何としても傑出しているのはクセである。難クセとして花筐、白鬚と並び称せられるが、三枚近くに及ぶ二段グセの本曲が最も長く、しかも詞章の表現の過酷さ（従って強弱の振幅が激しい）において比類がない。それだけにクセを謡い終えるとほつとするが、ここで息を抜いては駄目で、その後のキリがまた難物である。おそらく、謡曲の中で最も疲れる曲と言えそうである。

シテⅡ直面の曲に共通することであるが、引き立てた、やや運び日の謡い（発声）が基本となる。その意味で、最初の一セイが全体を左右しがちなので気合を入れて欲しい。

占の場面は詞の長丁場であるが、メリハリや下の句の張り加減など、文意を捉えて、一句一句を疎かにしないことが肝要。

ツレⅡワキの位で謡う。確りと強めに。キリに至るまでシテとのからみが多いだけに、シテ役との相性次第で、謡う方も、聞く方も、醍醐味を実感できる。

子方Ⅱシテとのやり取りが多いだけに、普通の子方と比べると格段に重い。七丁表の、隅田川に酷似した掛け合いは特に重要。シテが昂ぶってくるのに対して無邪気に。

天鼓

曲趣については「遊山」38号に記載したので省略。一つだけ付け加えるとすれば、前場と後場の暗と明が歴然としており、これを念頭に謡うべきこと。

専制君主に処罰された少年を、哀れみや同情をもって眺めるのは、現代人の曲解であって、この曲の眼目は、法的に許され、靈魂が弔いを受け、且つ、命よりも大事にした鼓を打つことの出来る、欣喜雀躍の少年の舞を見せることが眼目であって、前シテの老父の嘆き節は、あくまでも後シテの喜びの発現を助けるための枕のようなものと思つてよい。

シテⅡ前シテは打ちのめされた老人の嘆き節に終始するが、さりとして能であるが故に、態と悲しそうな謡をしてはいけない。全体に地味に、抑え気味に、弱々しくならぬように注意を。

二丁裏の一セイは節回しを大きくとって感情移入をする。サシになったら、淡々と。六丁表「御免なるべく・・」は剛吟から柔吟への転換を巧みにして欲しいところ。後シテはあくまでも爽やかに、力強く、自分の一番美しい声で。

ワキⅡ終始、勅使（故に、装束も厚板。大口である）であるから威厳をもって謡う。従って後場でのシテとの合吟は、シテに合せながらも、ワキとしての個性を維持して欲しい。